

奥さまは魔女

2005(平成17)年7月19日鑑賞(試写会・梅田ピカデリー)

★★★★



監督・脚本・製作＝ノラ・エフロン／出演＝ニコール・キッドマン／ウィル・フェレル／シャーリー・マクレーン／マイケル・ケイン／ジェイソン・シュワルツマン／クリスティン・チェノウィス／ヘザー・バーンズ／ジム・ターナー／スティーヴン・コルバート／デヴィッド・アラン・グリア／スティーヴ・カレル (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2005年アメリカ映画／103分)

第2章

モチないあなたも映画で擬似恋愛

……クール・ビューティの最高峰女優ニコール・キッドマンが、何ともキュートでかわいい魔女に大ヘンシン! 「鼻ピクピク」の得意技で『奥さまは魔女』のリメイク版に登用された彼女は、今は落ち目の人気スターと恋の道に……。しかし、魔女と人間との恋愛なんてホントに成り立つの……? 往年のオードリー・ヘップバーンを彷彿させるすばらしいファッションと可憐でキュートなニコール・キッドマンの新たな魅力を満喫しながら、バカバカしいが良質で陽気なアメリカ風の笑いをタップリと楽しもう。こんな映画、ストレス解消に最高だよ……。

なぜ今『奥さまは魔女』?

今年の夏、最大の話題を集めたハリウッド映画は『スターウォーズ エピソード3』と『宇宙戦争』の2本だが、ハリウッド映画の興行収入が全体としてガタ落ちになっていることは周知の事実。これについて、ジョージ・ルーカス監督は「映画館での興行収入は第二次世界大戦以降、減少を続けている。現在、利益を生み出しているのはテレビとDVDだ」と前置きし、「これからは(自宅のテレビといった)小画面で楽しめるものが増える。急速な技術革新の最初の犠牲になるのが(映画館で楽しむことを想定してつくられた)大作映画だ」と解説(弁解?)している(2005(平成17)年7月2日付産経新聞)。そういう面があることはたしかだが、もっと根本的な問題は、近年のハリウッド映画が『ハルク

『HULK』(03年)、『キャットウーマン』(04年)、『バットマン ビギンズ』(05年)などのアメリカン・コミックものに頼ったり、韓国や日本のホラー映画のリメイク版に頼ったりしてきたことのツケが回ってきたのでは……? そういう意味で、なぜ今、あの1960年代の超人気シリーズ『奥さまは魔女』なのか……? そういう疑問を抱きつつ、私は何ととってもニコール・キッドマン主演というだけで、何が何でもと勇んで(?) 試写会場へ。

「ダーリン」は? 「サマンサ」は?

『奥さまは魔女』の旦那様の名前は文字どおり「ダーリン」。リメイク版でこの「ダーリン」役として登場するのは、話題映画で大コケしてしまった落ち目の人気スター(?) ジャック(ウィル・フェレル)。マネージャーのリッチー(ジェイソン・シュワルツマン)とともに映画スターとしての権威を保ちつつ、テレビドラマ出演の交渉を強気に進めていくのは結構大変そう……?

そのうえ、奥さまとなる魔女の「サマンサ」がかつてのエリザベス・モンゴメリーのように魅力いっぱいの看板女優になったのでは、主役となるはずの「ダーリン」がかすんでしまうため、魔女役の選定が難しい……? そこで、たくさんの新人女優をテストしたが……?

「サマンサ」役を演ずるについての必須条件は「鼻ピクピク」。それを完璧に演じられる女優は……?

主人公は本物の魔女

魔女のイザベル(ニコール・キッドマン)が人間界に舞い降りてきた。この主人公の願いはたった1つ。「普通の人間になりたい。そして普通の恋愛をしてみたい」というもの。そんなイザベルが今日は家探し。「魔法は封印!」と心に誓っているものの、現実は一層厳しく、家を借りるについて「保証人不要」としたり、車を登場させたり、テレビの配線にイライラしてやっぱり魔法の力で接続させたりと、なかなか魔法と縁を切ることができない。そんなイザベルを見て父親のナイジェル(マイケル・ケイン)は、「バカなことを考えるものじゃない」と忠告したが……?

隣人のマリア（クリスティン・チェノウイス）とお友達になったり、スーパーで買い物をしたりと人間生活に馴染もうと懸命のイザベル。そんなイザベルがある日、本屋で本を探していると……？

イザベルの鼻がピクピクするのを本棚の隙間から発見したジャックは、たちまちイザベルに対して「女優にならないか？」と口説きかけた。その結果は……？

ニコール・キッドマンの魅力その1 可憐・キュートそしてチャーミング

ニコール・キッドマンは目下私の1番好きなハリウッド女優。前作の『ザ・インタープリター』（05年）が大ヒットしなかったのは残念だが、「今のハリウッドでは、このような社会派ドラマはちょっとしんどいから」と考えて、無理矢理納得……？ 冒頭に書いたとおり、ハリウッド映画がリメイク版に走ることに私は批判的だが、この映画だけは別。とにかくこの映画には難しいストーリーはいらない。

『恋人たちの予感』（89年）でメグ・ライアンを一躍「ラブコメの女王」へと押しあげたのは、その脚本を書いたノーラ・エフロン。彼女はその後、『めぐり逢えたら』（93年）、『ユー・ガット・メール』（98年）等を次々と脚本・監督し、ハリウッド映画にラブ・コメディ、ロマンティック・コメディという一分野を確立させていった。そんな、ノーラ・エフロンが脚本まで書いているのだから、この『奥さまは魔女』がロマンティックなラブ・コメディとなっていることはまちがいないはず。40歳近くになったニコール・キッドマンだが、可憐・キュートそしてチャーミングというホメ言葉がピッタリ……。

ニコール・キッドマンの魅力その2 何とも魅力的なファッション

そのうえに何とも魅力的なのが、往年のオードリー・ヘップバーンを彷彿させるニコール・キッドマンのファッション。『奥さまは魔女』は1960年代のテレビドラマだから、その時代のファッションが今のものと大きく異なるのは当然。もちろん私には、そんなファッションの詳しいことはわからないが、少くくは、そしてイメージくらいはわかる。詳しくはパンフレットにある、中村孝則（ファッション・コラムニスト）の「この映画で、新たなファッション・ミューズが誕

生する！」の解説を参照してもらいたいが、とにかくそのファッションは、彼女の抜群のスタイルとよく動く大きな瞳そしてファッションモデル顔負けの着こなし術と相まって実に魅力的！ さらに、コメディタッチの数々のしぐさやダンス風の振りつけの中で時折見せる、彼女の身体の柔軟性にも要注目だ！

笑いはあくまで陽気なアメリカ風……？

この映画の中でわかることは、ジャックは何本もの主演映画のある大映画スターだったが、前作が興行的にも内容的にも大コケとなったため、大きく落ち目になっているらしいということ。映画の大スターがテレビに出るということは、一種の「都落ち」とも言えるものだが、そこは「モノは考えよう」……？

ジャックもマネージャーのリッチーもこのテレビ出演を人気回復のテコにしようと狙ったのは当然。しかし、どうもこのジャックは自ら言うように、あまり演技は得意ではなく、いくつかの「得意ワザ」がある程度の俳優……？ もっとも全身でぶつかる体あたりの演技（？）やアドリブは得意なようで、サマンサとの仲がうまくいっていた時の演技はサイコー……。しかし、魔女のイザベルに魔法をかけられたり、イザベルを失ってパニック状態になった時のジャックは……？

この映画でのジャックの体あたりの演技は大いに笑わせてくれるもの。そして、その笑いは、これぞ陽気なアメリカ風！

ストレス解消に最高！

ニコール・キッドマンは最近よく「クール・ビューティ」最高峰の女優とされている。『ムーラン・ルージュ』（01年）ではすばらしい歌と踊りの才能を発揮したが、その後の『めぐりあう時間たち』（02年）、『ドッグヴィル』（03年）、『コールドマウンテン』（03年）、『白いカラス』（03年）、『ザ・インタープリター』では、とにかく最高の演技とクール・ビューティとしての魅力を見せつけ、ついに『めぐりあう時間たち』ではアカデミー賞最優秀主演女優賞を……。これらの作品での重たい（？）ニコール・キッドマンの役柄に見慣れていた私には、この映画の冒頭に登場する、何とか封印しようとしているのに、つつい魔法を使ってしまうというニコール・キッドマンのコミカルな演技を見て、まずこの映画を鑑

賞する姿勢を「リラックス型」(?)に切り換えることを自分で確認。すると以降、笑えるシーンでは遠慮なくゲラゲラと……。

試写会場はほぼ満席状態だったが、面白いシーンが登場するたびに、会場内には大きな笑いが……。30分ドラマの『奥さまは魔女』自体が、必ず何度かは笑いをとるように演出されているから、バカバカしいと思いつつ観客もついバカになってゲラゲラと……。私の左隣りは1人で来ていたオッサンだったが、右隣りは2人連れの若い女性。したがって、その反応が早いうえ「アハハ」のバカ笑いから、「まあかわいい！」などの感嘆詞まで表現が多様……。普通ならそんなお隣の反応にイライラする私だが、この日ばかりは別。こりゃストレス解消に最高！

脇役も充実……

ロマンティック・コメディの鉄則の1つは「ラストは必ずハッピーエンド」ということだが、ストーリーづくりの鉄則は、あくまで主役の男女2人を表に押し出して、脇役は脇役に徹すること。下手に脇役が出しゃばるとロクなことがないのは当然。脇役としてこの映画で重要な役割を果たすのが、イザベルの父親のナイジェルと『奥さまは魔女』の中で母親役となるアイリス（シャーリー・マクレーン）。そして一種の「狂言回し」的な役割でイザベルとジャックにアドバイスを与え、2人の恋の成り行きに影響を及ぼすのがイザベルのクララおばさんとジャックのアーサーおじさん（スティーヴ・カレル）。

娘に対して「人間との恋なんて成立しない！」とくり返していた父親がアイリスに惚れていく姿はちょっとした「オチ」になっているが、それをあくまでサブ・ストーリーと位置づけたのはさすがノーラ・エフロン監督。これだけ老カいで安定した(?)おじさん、おばさんたちに囲まれているのだから、イザベルとジャックの恋がハッピーエンドで終わるのも当然と納得……。数年後、新居で幸せに暮らす2人をスクリーン上に観て、ハイ拍手……。今日は幸せなひとときとなりました……。

2005(平成17)年7月20日記